

北国へ

作：岡崎ルツ子

演出：小川政弘

登場人物

岡田純一 主人公。大学3年。

山本洋 大学3年。クリスチャン。

会田民男 福島で酪農業を営むクリスチャン。

久子 民男の妻

めぐみ 民男の長女

ゆずり 民男の次女

正男 民男の長男

運ちゃん

その女房

ボアズ 聖書の登場人物

< 前編 >

都内の某大学構内

- ガヤ。パパーッと車のクラクション。

純一 「洋、おい、洋。」

洋 「あ、なんだ、岡田か。また、車変えたの？」

純一 「ま、な。乗れよ。バイト行くんだろ？」

洋 「悪いね。」

女子A 「岡田くん、すごーい、シルビアじゃない。」

女子B 「あたしたちも乗せてよー。」

純一 「また今度、じゃな。」

女子 「けちー。」「あーあ。」

車中

洋 「相変わらずモテるね。」

純一 「なに、洋まだ彼女いないの？今度、女の子紹介してやるか？」

洋 「え、いいよ。」

純一 「おい、大学3年にもなって彼女いないなんて、カッコ悪いぞ。今年こそバシッと決めるよ。」

洋 「岡田みたいにはいかないよ。あ、ここでいいよ。サンキュー。」

純一 「明日の夜、渋谷で合コンあるんだ。行こうぜ」

洋 「だめなんだ。教会の祈祷会があるからさ。(車を降りて)じゃ。」

- 急ぎ遠ざかる洋の背中に向かって -

純一 「おい、そんなんじゃ、仙人になっちまうぞー！…ちえっ。」

N 俺は岡田純一。都内のある国立大の3年。人気アイドルグループのメンバーの一人に名前も顔も似てるせいか、女の子に不自由したことなし。夏はサーフィン、冬はスノーボードとばっちり学生生活をエンジョイしている。勉強する暇なんかないのだ。そんな俺が留年もせずにいられるのは、ひとえに彼、山本洋のおかげだ。彼の講義ノートと代返がなかったら、俺は卒業まで何年かかるかわからない。だからせめてものお礼に女の子を世話してやって、彼の青春をばら色に染めてやろうと思っているのに、そっちの方はまったく欲がない。優しくいいやつだが、クリスチャンという変わりもので、面白いことに誘ってもやれ礼拝だ、祈祷会だと取りつく島もない。だいたい奴はお世辞にもハンサムとはいいいかねるし、ルックスにもあんまり気を遣わない。女の子にもてたいと思ったら、あんな高校時代のぼろいGパンなんてはいてたらだめなのに。 そんな洋に事件がもちあがったのは、冬休みに入ってすぐのことだった。

喫茶店

女子C 「ねえねえ、岡田君は誰と初詣行くの。」

純一 「誰だっていいだろ。」

女子D 「ね、やっぱり文学部の高野さん？ね、そうでしょ。」

純一 「うるさいなー。あんまりしゃべくとコーヒーごちそうしてやんないぞ。」

女子C 「あれ、山本君じゃない？なんかへーん。」

女子D 「わ、ほんとー。くらーい。」

N 見ると、洋が真っ青になって、ふらふら歩いて来る。

純一 「おい、洋、どうしたんだよ。洋ったら。」

洋 「岡田。ぼ、ぼく…。う…。」

純一 「バカ、泣くなよ。こんな所で…。おい、熱もあるんじゃないか？」

女子C 「ちょっと、大丈夫？病院に行ったら？」

純一 「寮の洋の部屋につれてくよ。しっかりしろよ、歩けるか？」

N 冬休みの学生寮はひっそり静まりかえっている。部屋に運んでベッドに寝かせた。レトルトのおかゆをコンビニから買ってきて食わせてやると、洋はやっと一息ついたようだった。

寮の洋の部屋

純一 「大丈夫か？」

洋 「ごめん。ちょっとショックなことがあって…。」

純一 「ショックって？」

洋 「…失恋したんだ…。」

純一 「失恋？お前が、か？」(吹き出しかけて)

N おっと、笑っちゃいけない。こういう真面目人間の方が、思いこんだら一途に突っ走る、一番危険なタイプなのだ。

純一 「おい、しっかりしろよ。失恋のひとつやふたつでめそめそするなよ。また、新しい出会いもあるさ、なんたって人類の半分は女なんだぜ。」

洋 「…でも、百合子さんはひとりだけだよ。」

純一 「おまえなあ…。」

N せっかく親友の俺が慰めてやろうってのに、夕方になって疲れたのか、そのまま洋は寝入ってしまった。熱が下がるまで俺は毎日、洋の部屋に寄り食べ物を届けてやった。冬休みで寮のおばちゃんがないのだ。彼の熱は風邪なのか、失恋のショックで出たのか、よくわからないが、あのやつれ振りを見たら、本当にショック熱かも知れない。

寮の洋の部屋

純一 「どう、調子は。」

洋 「うん、だいぶいいよ。岡田、ありがと。君のおかげだよ。」

純一 「いいって。それよりさ。」

洋 「ん？」

純一 「おまえ、失恋したっていったけど、それ、もう決まりなの？」

洋 「うん、たぶんね。百合子さんが婚約するって聞いたんだ。」

純一 「それって過去形？」

洋 「ううん、お正月すぎってから仙台の教会で、婚約式なんだって。」
純一 「なんだ、来週じゃん。お前、告白したんだろ？」
洋 「ううん、そんなこと…。」
純一 「ばっかだなあ。相手に好きだの一言も言ってないんか？」
洋 「う、うん…。」
純一 「なっさけねえの。好きなんだろ、病気になるくらい。」
洋 「うん。…好きだよ。大好きだ。」
純一 「(ちょっと考えて)おい、出かけるぞ。」
洋 「え、どこに？」
純一 「仙台に決まってるだろ。」
洋 「ええっ、そんな急に…、お、お金だってないし…。」
純一 「貸してやるって。今から俺の車で高速飛ばせば、夜中には着くだろ。感激すぞう、百合子さん。『まあ、そんなに私のこと、愛してくれてるのね。洋さん。』…なんてさ。」
洋 「で、でも相手の人に失礼だし…。」
純一 「だって好きなんだろ？『惜しみなく愛は奪う』って夏目漱石も言ってるじゃないか。」
洋 「…有島武雄だよ。」
純一 「つべこべいうな。とにかく行くぞ。」
洋 「お、岡田、ちょっと待ってよ…。」

車の発車音、軽快な音楽

N こうして、俺と洋の旅が始まった。北へ北へと愛車のシルビアは、走る走る。ここで解説しておく。道々聞いたところによれば、仙台の百合子さんというのは、洋の幼なじみでクリスチャンの沢村百合子さん。1つ年上で小学校の先生をしている。洋は小さいときから百合子さんに憧れていて、お嫁さんにするならあんな人と思っていたそう。この冬実家から、百合子さんが商社マンと婚約するらしいとの情報を得て、洋はすっかり打ちのめされてしまった。今になって自分が本当に彼女を愛していたことに気がついたわけである。奥手の洋らしい話だ。

高速道路上

人々のざわめき

純一 「寒いなあ、ちくしょう。おい、うどん食おう。」
洋 「うん。」
店員 「はい、おまちどうさまっ。」

サービスエリアの食堂

二人、うどんをすする。

- 純一 「しかしなあ、お前に、そんなマジな相手がいたとはねえ。」
洋 「…あのさ…」
純一 「何だよ。忘れもんでもしたか。わかった、プレゼントか。」
洋 「いや、そうじゃなくて…やっぱり、戻ろう。」
純一 「…何言ってんだよ、ここまで来てさ。」
洋 「うん、ほんとに君には悪いけど…」
純一 「そうじゃねえだろ。俺のことなんかいいよ。この後に及んでまだ腹が決まらないの
かって言ってるの。」
洋 「いや、僕さ、これはやっぱり神様のみこころだって思うんだ。」
純一 「お前ねえ。アーメンで真面目に生きるのもいいけど、神様が恋人紹介してくれるわ
けじゃないだろ。自分のことは、自分で決める。…それともあれか。よく考えてみたら、
やっぱり彼女のこと、それ程じゃなかったってことか。」
洋 「違う、そうじゃない、そうじゃないけど…」

N そのまま洋は黙りこくってしまった。こういうときの洋にはホントにイライラする。宇都宮を出たのは、7時をまわっていた。北国の夜は早い。あたりはすっかり暗くなっていた。

- 純一 「おい、今いくらもってる？」
洋 「ええと、…2千2百円だけ。」
純一 「しけてんなあ。さっきガソリン入れたから、俺も3千円ぼっちしかない。夕飯もまだだし、高速降りよっか。」
洋 「ごめん。迷惑かけて。」
純一 「いいって。」

国道

- 車の音 -

- 純一 「静かだなあ。あかりがまばらだよな。」
洋 「こちら辺はみんな田んぼだからね。コンビニなんてないし。」
純一 「あ、雪。」
洋 「ほんと。」

N ちらちらと花びらのように降っていた粉雪は、30分とたたないうちに、大雪になってきた。風もふいてきて、次第に視界も見えにくくなってきた。

- 吹雪 -

純一 「すげえなあ。俺、宮崎出身だから、こんな、初めてだよ。おい、道、どっちいけばいいの？」

洋 「あれ、おかしいな…」

純一 「おいおい、どうしたんだよ」

洋 「なんか、知らないところに出ちゃった。」

純一 「えええっ洋、頼むよー！」

- 急ブレーキ -

二人 「わああああああっ。」

N その瞬間、俺と洋の乗った車は見事に田んぼに突っ込んでいた。

< 後編 >

夜、国道

二人 「わあああああああっ。」

後続車 「(東北なまりで)おおい、どうしたい。」「だいじょぶかい？」

純一 「だ、大丈夫です。洋、お、お前は？」

洋 「ちょっと肩を打っただけ…、あいてて…」

運ちゃん 「兄ちゃんたち、こんな雪道、チェーンも無しで、無鉄砲だなあ。」

純一 「す、すみません。」

N 俺は岡田純一。大学3年生。こんな夜に吹雪の中を車を走らせてるのにはわけがある。親友のクリスチャン、山本洋の初恋の人、百合子さんが来週には仙台で婚約してしまう。それを阻止するべく、俺たちは取るものも取りあえず東京から車を飛ばしてきたのだ。ところが所持金は心もとないし、道は迷うし、スリップして田んぼに片輪突っ込むしで、まったく泣きつらにハチである。親切な運転手さんたちが、力を合わせて1時間ばかりで車輪を引き揚げてくれた。

二人 「どうもありがとうございましたあ。」

運ちゃん 「気をつけて行けよ。」

洋 「あのう、ここ、どこら辺なんでしょうか…？」
運ちゃん 「白河越えたところだよ。」
洋 「じゃあ、福島県に入ったんですね。」
運ちゃん 「2つ目の信号、右に曲がったら、4号線だから。」
運ちゃんの女房 「何だか、頼りねない。」
二人 「だいじょぶですっ。ほんとにありがとうございましたあ！」

N 事故ったけど、車も無事だし二人とも怪我がなくほっとした。安心したら猛烈に腹が減ってきた。おまけにめちゃめちゃ寒い。もう10時を過ぎていたし、これ以上運転するわけにもいかない。どうしようと思ったとき、洋が、合田さんという知り合いのクリスチャンが福島で酪農をやっている事を思い出した。「早く思い出せよこの野郎」って感じ。会田さんに電話をして、そこに一晩ごやかかいになることにしたが、迎いの小型トラックが来るまで、なんて時間の経つのがのろく感じただろう。合田さんの家に着いて、温かい豚汁と芋の煮っ転がしをごちそうになった時は、本当に生きてて良かった、と思った。

合田宅

純一 「うまい…、あの、おかわりありますか？」
光男 「よく食べるなあ、兄ちゃんたち。」
合田 「いいって、いいって。遠慮なく食べるや。」
妻 「なんぼでも、おかわりありますからね。遠慮しないでねえ。」
洋 「急に押し掛けて、ごめんなさい。合田さん。」
合田 「なあに、主にある兄弟だもの。困ったとき助け合うのは当たり前だ。」
正男 「兄ちゃんたち、うちの牛乳飲む？」
純一 「わあ、ぜひごちそうになりたいなあ。」
ゆずり 「うちのルツの牛乳、すごくうまいよ。」
正男 「あつつくしてね、砂糖入れんだ。」

N 確かに、それは心の中まで甘く感じるほどだった。

純一 「でも牛にしては変わった名前だね。ルツなんてさ。」
合田 「聖書の人物からとったんだよ。うちで生まれる牛はみんなそだ。」
めぐみ 「ヨハネとか、マリアとか、家族で順番に名前つけんの。」
妻 「正男なんて間違っ、メスにダニエルってつけちゃったもんね。(笑)」
めぐみ 「夫婦の牛はボアズとルツ。あたしがつけたの。」

正男 「姉ちゃん、ルツ記好きだもんね。」
めぐみ 「いいじゃん。ロマンチックだもん。」
純一 「へえ、聖書にロマンチックな話なんてあるの。知らなかった。どんな話？」

N がぜん俺は身を乗り出した。男と女の話なら、この際聖書でも何でもいい。

合田 「興味あっかい？ んで、読んでやっから。」

N 合田さんは、旧約聖書のルツ記というところを読んでくれた。モアブ人のルツは、夫に死に別れた後、姑のナオミと共に、ナオミの故郷ベツレヘムに行く。見ず知らずの土地に住むのはルツにとってものすごく大変な事に違いないのに、彼女は姑を見捨てず、落ち穂拾いをしながら貧しい生活をおくるのだ。

めぐみ 「それが、ルツの働いている畑の地主は大金持ちのボアズという人で、ルツにとっても親切にしてくれたのよ。」
正男 「それって、恋？」
合田 「んまあ、そうとも言うな。おまけにボアズはナオミの親戚でナオミの失った土地を買い戻す権利のあった人だった。」
純一 「そうか、それでボアズとルツは結婚しました。めでたしめでたし、ですね。」
合田 「ところが、だ。ボアズよりも近い親類がいたんだ。その人が当時のユダヤの習慣に従って、ルツと結婚してもいいと言えど土地もルツもその人の所有になっちゃうんだ。」
純一 「そんなの無視すればいいじゃないですか。だってボアズもルツも好き同士でしょ。」
合田 「けれどボアズはそうしなかった。」

ボアズ 「(エコー)ルツさん、もしその人があなたに親類の役目を果たすなら、そうさせてあげなさい。しかし、その人があなたに親類の役目を果たすことを喜ばないなら、私があなたを買い戻します。神は生きておられる。」

合田 「ボアズは神様の御心にお任せした。翌日、その親類の人は買い戻しの権利をボアズに譲り、二人は結婚することができたんだな。」
めぐみ 「素敵、そうしてボアズとルツはイエス・キリストの先祖になったのよね。」
純一 「ふーん、いい話ですね。」

N 俺は正直言って、聖書の中の愛の話に圧倒された。俺の回りに転がっている、惚れた、振った、別れたの世界とはまるで次元が違う。何かその神様が、俺のために聞かせてくれた話のような気がした。だが洋はどうなんだ。この聖書の世界に生きて

いるはずの洋は、あんなに愛に傷ついている。神様がいるんなら、あいつの気持ちを癒すことはできないのか。その晩、俺はそんなことを考えていた。

N 翌朝俺と洋は合田さんたちに別れを告げ、また車に乗った。夕べの雪はもうすっかりやんでいて、冷たい冬の青空が広がっている。

車中

洋 「岡田、白鳥を見に行こう。冬の間、シベリアから渡って来るんだよ。」

純一 「? いいけど…」

阿武隈川のほとり

N 阿武隈川に白鳥が群をなしていた。一面の雪景色だ。弱い冬の光が雪に反射してまぶしかった。

洋 「岡田、僕…、仙台には行かない事にした。」

純一 「ええっ、まじかよ。じゃ、憧れの百合子さんが婚約しちゃってもいいのかよ。」

洋 「そりゃ、いやだよ。苦しいよ。でもね、今、百合子さんと相手の人は、婚約しようとしている。百合子さんたちも、神様の前に祈ってそう決めたはずだ。そのことは、大切にしないでいいことなんだ。それでも、もし神様のみこころだったら、百合子さんは僕に与えられる。ポアズがルツと結婚できたようにね。でも、たとえそうでなくても、僕は彼女の幸せのために祈ることができる。それは僕自身にとっても、とても幸せなことなんだ。それで、いいんだ。」

純一 「洋…」

洋 「いいんだ。神様にお任せするよ。…帰ろう、東京に。」

N きっぱりとそう言い切った洋の顔が何だか眩しく見えた。

純一 「…わかった。お前がそこまで言うんなら、帰ろう。」

- 車発車する。エンジン音。

N 洋は、いや、クリスチャンというのは、こんなときにもまず神様のことを考えるらしい。自分の感情のままに行動するんじゃなくて、神様に任せる。初めは、自分の好きな人に告白するのをためらう洋が、情けない奴に思えた。だけど話を聞いているうちに、神様に任せることと、百合子さんを大切に思うことが、どうも同じことのように思

えてきた。洋はそうやって、好きな人の幸せを神様に祈ろうとしている。そんな洋の気持ちは、大事にしてやらなくちゃいけないような気がした。

俺たちの小さな旅は終わろうとしていた。白鳥たちがほんの少しの間俺たちの乗った車に並んで飛んでいたかと思うと、列を成して彼方へ飛び去っていった。

< 完 >